平和な世界へ　～いま、僕にできること～

巽　由一

十六歳の春休み、僕はカンボジアの田舎道で、孤児院の子どもたちとトゥクトゥクに揺られていた。太陽はすでに高く昇り、吹き付ける風は生ぬるい。子どもたちは、うだるような暑さをものともせず、それぞれに歌ったり騒いだりしている。僕の隣に座っていた男の子は、僕がコチョコチョに弱いのをいいことに、僕の横腹を攻撃してきた。僕はこの元気な人々、特に子どもたちに惹かれて、再びカンボジアを訪れたのだ。

初めてカンボジアの地を踏んだのは十五歳の夏。カンボジアに住むことになった母の友人を訪ねてのことだった。僕はその友人が滞在している孤児院、Peaceful Children Home2(PCH)のゲスト棟に一週間滞在し、そこの子どもたちと遊んだり、観光名所を巡ったりした。

このときは、初めての海外旅行だったこともあり、暗い歴史を持つカンボジアや滞在先である孤児院に対して身構えていた。しかし、実際のところ、カンボジアの治安は拍子抜けするほど安定しており、孤児院の子どもたちや、その他出会った人は皆、非常に明るくエネルギッシュだった。そんなカンボジアのパワーに圧倒され、またここに来ると誓った僕は、帰国後、必死にアルバイトをして十万円ほどお金を貯めた。

翌年の春、再びカンボジアを訪れた僕は、前回と同じPCHに約二週間滞在することとなった。また、Hope Of Children（HOC）という別の孤児院にも数日間、ボランティアとして通った。まだ高校生の頼りない僕が、その孤児院に通ってできることといえば、子どもたちと遊んだり歌ったりすることぐらいで、ボランティアというにはいささかお粗末だったが。

二つの孤児院に関わることになったわけだが、そこで貧困や不幸を感じることはあまりなかった。どちらの孤児院にいる子どもも、ほとんどは家族がおり、貧困や教育の問題から孤児院に預けられている。子どもたちは孤児院から学校に通っており、長期休みには家に帰る子どもが多い。両親を亡くし、帰るところがない、いわゆる孤児は全体の一割にも満たないのだ。そう考えると、学校の寮とさほど大きな違いはないように思えた。

その日も、朝早くPCHを出て、市場で朝食を済ませた後、HOCに向かった。でこぼこ道を自転車で三十分。木陰のない道には太陽が容赦なく照りつけ、HOCに到着する頃にはヨレヨレのTシャツがすっかり汗まみれになっていた。HOCに着くとあちらこちら

で遊んでいる子どもたちが声をかけてくれる。早速みんなと遊びたい気持ちを何とか抑え、亮子さんに挨拶に行った。岩田亮子さんは、カンボジア人の僧侶であるムニ様とともに、HOCを核となって支えている方である。いつも通り明るい笑顔で迎えてくれた亮子さんが、今日は近くにあるキリングフィールドに行こうと提案してくださった。カンボジアでは、数十年前、ポルポト政権の時代に大量の一般市民が虐殺された。その虐殺の場となったところがキリングフィールドと呼ばれ、現在も同国内に点在している。

子どもたちと一緒に大型のトゥクトゥクに乗り込んだ。キリングフィールドに行くといっても、みんなでワイワイと行くので、社会勉強というよりは、むしろピクニックの気分だ。小川に沿ってガタゴトと進み、少ししてから脇道に入った。

静かな森の一角。堀のようにも見える池を前にそのお堂は建っていた。お堂はこのあたり特有の寺院に似ており、屋根にはきらびやかな装飾が施されている。正面はガラス窓になっており、鉄格子がはめられていた。子どもたちに続いてお堂に近づくと、少しくすんだガラスの内側がよく見えたが、そこで見たものに言葉を失った。お堂の内側は、十段ほどの棚状になっており、そこには人の頭蓋骨が所狭しと置かれていたのだ。そのいくつかはこちらを見つめている。さんさんと照る日差しの下でも、その目は冬の空のように虚ろだった。驚きと恐怖が混ざり合いこみ上げてくる。あんなに賑やかだった子どもたちも、この異様な光景を前にして、すっかり静かになっていた。僕は気持ちを落ち着けようと、目を閉じ、手を合わせ、この見たことのない光景を心の中に落とし込んだ。

亮子さんによると、近くに収容されていた人々が前の池で拷問され虐殺されたのだという。今、カンボジアがこのように平和であることをうれしく思ったが、亮子さんが次に発した言葉に危機感を覚えた。「学校の教科書で、この虐殺の時代について書かれているのはたったの一、二ページだけなの。」二百万以上の人の命が犠牲になったともいわれるその出来事について、学校ではほとんど何も教わらないという。これでは、また同じようなことが起ころうとしていても、誰も止められないではないか。ゾッとして亮子さんを見ると、彼女はお堂に手をあわす子どもたちを見つめていた。彼女は少しでもこの歴史を身近に感じておくべきだと思い、子どもたち、そして僕をここに連れてきたのだろう。僕はもう一度、お堂に手を合わせ、祈った。

この頃になってようやく、子どもたちのことを思ってひたすら動き続けている亮子さんや、その他多くの孤児院を支える存在を、はっきりと認識したような気がする。カンボジアで見た孤児院は学生寮と何ら変わりないと考えていたが、それを支えている人や寄付のことを、僕はしっかりと認識していなかったのだ。子どもたちが生活するのに必要な諸費用はすべて寄付でまかなわれていて、それがなくなれば、誰一人養っていけないのだ。子

どもたちには、休みに帰る家があったとしても、安定した日常を送れる家がない。だから彼らは孤児院で過ごしているのだ。僕はそれすら分かっていなかった。孤児院での子どもたちの生活は、一見、楽しく充実しているように見えるが、多くの支えなしには成り立たないのである。このような不安定さの上に成り立っている生活が平和だとは、到底いえないだろう。

過去から現在に至るまで、世界の様々なところで罪のない一般市民が殺されてきたことを知った時、僕は身の回りでそれが起こることを恐れて、本能的にその理不尽な殺戮が起きない世界を望んだ。そして、その理不尽な殺戮が起きない世界が僕にとっての「平和な世界」だった。しかし、その望みを実現するのは、あまりにも難しく、絶望的に思えたので、そのことは極力考えないようにしていたのだ。僕は二度のカンボジア渡航を経て、理不尽な殺戮をなくすだけでは、平和な世界は実現しないと考えるようになった。そこには、貧困や教育などの問題があり、それを解決せずして「平和な世界」は実現し得ない。その事実は絶望的なものであったが、貧困問題に対しては自分にできることを見出せたのだ。

帰国後、僕は学校の小さな文化祭でカンボジアの孤児院への寄付を募ることを決めた。寄付活動は問題の根本を解決しないかもしれない。一人の子どもが寄付で生活できるようになっても、他の場所で他の誰かが同じような状況に陥るだろう。しかし、その寄付がなければ、その一人すら救われないのだから、寄付にも意義があるのだ。亮子さんたちが行っていたのは、そういう地道な行為だったのだと考え、寄付を呼びかけた。寄付は予想以上に集まり、そのことには大きな意味を感じた。だが、それ以上に良かったことがある。寄付の場で、多くの人が僕の話に耳を傾けてくれ、それぞれの思いを共有してくれたのだ。教室の片隅にもうけた寄付のコーナーに、生徒や保護者、教員が何人も集まって、どうすれば平和になるのか本気で話し合うことができた。動きたい、何かせねばと考えている人が想像以上にいたのだ。この体験は、僕の思い描く未来を少しばかり明るくしてくれた。

僕は「いま、自分にできること」をすることを覚えた。機会を見つけて、寄付を募ったり、自分自身もアルバイトをして稼いだお金を寄付に当てたり。旅をしてそこにある現状を体感し、様々な人と対話することもまた「いま、自分にできること」だと考えた。実際に行動していると、どんな問題も少しずつ改善できるものだと実感するようになった。そうするうちに、絶望を感じていた戦争や虐殺にも「自分にできること」を見いだせるようになっていた。

先月、後輩の一人が呼びかけ人となり、パレスチナ、ガザに関するパネル展を学校で開いた。その展示を企画していく過程で僕は気づいたのだ。今まで、戦争などの問題に関し

て、僕は考えることしかしていなかった。だから、僕の感情は恐怖と絶望で終わっていたのだ。パネル展では、来てくれた人が自分の思う平和について語ってくれ、共感することもあれば、考え方の違いに驚かされることもあった。多くの人の協力で十万円以上をガザに住む子どもの生活支援のために寄付することもできた。展示を企画し、皆で考えを語り合っていると、絶望的だったものごとにも突破口が見えてきたのだ。

つい数日前「イスラエルがガザ攻撃再開」というニュースを見て唖然とした。以前の僕なら、気分が悪いので極力ニュースを見ないようにしていただろう。でも、今の僕は違う。友達と話し、できることをひたすら模索することができる。こんな署名が行われている、こんな映画があるなど情報を共有する。すぐに戦争を止めることはできないが、それが何もしない理由にはならない。

僕はあのとき、カンボジアで、大量の骸骨を前に手を合わせ、こう祈った。「こんなことが二度と起こりませんように」。でもこれは、神頼みでは解決しない。自分が動いて叶えるのだ。そのために、僕はこれからもできることを常に探し、行動し続ける。

参考文献

Bruce Sharp. "Counting Hell". Mekong Network.
https://www.mekong.net/cambodia/deaths.htm,(参照: 2025-03-29)